

# 教育 を 読む

河合文化教育研究所  
主任研究員 丹羽健夫

「ふらんすへ行きたしと思へども  
ふらんすはあまりに遠し  
せめては新しき背広をきて  
きままなる旅にいでてみん・・・」  
と詠った、あの日本近代詩の父とい  
われる萩原朔太郎が、芭蕉とならぶ  
江戸時代の俳人で、しかも明治の新  
体詩などよりはるかな昔に、こころ  
の赴くままにモダンな詩を創ってい  
たと謝蕪村を、鑑賞し詠嘆し論じた  
著書である。以下、蕪村の句のいく  
つかを味わってみよう。

愁<sup>ほろ</sup>ひつつ丘<sup>かみ</sup>に登れば花<sup>はな</sup>萩<sup>はら</sup>  
妹<sup>いも</sup>が垣<sup>かき</sup>根<sup>ね</sup>三<sup>さん</sup>味<sup>み</sup>線<sup>せん</sup>草<sup>くさ</sup>の花<sup>はな</sup>咲<sup>さ</sup>ぬ  
白<sup>しろ</sup>梅<sup>うめ</sup>に明<sup>あ</sup>ける夜<sup>よ</sup>ばかりとなり<sup>なり</sup>にけり  
遅<sup>おそ</sup>き日<sup>ひ</sup>のつもりて遠<sup>とほ</sup>き昔<sup>むかし</sup>かな  
菜<sup>な</sup>の花<sup>はな</sup>や鯨<sup>くじら</sup>も寄<sup>よ</sup>らず海<sup>うみ</sup>暮<sup>くれ</sup>ぬ  
梅<sup>うめ</sup>遠<sup>とほ</sup>近<sup>ちか</sup> 南<sup>みなみ</sup> すべく北<sup>きた</sup>すべく  
地<sup>ぢ</sup>車<sup>ぐるま</sup>のとどろと響<sup>ひび</sup>く牡<sup>はた</sup>丹<sup>たん</sup>かな  
秋<sup>あき</sup>の燈<sup>あかり</sup>やゆかしき奈<sup>な</sup>良<sup>ら</sup>の道<sup>みち</sup>具<sup>ぐ</sup>市<sup>し</sup>  
月<sup>つき</sup>天<sup>てん</sup>心<sup>しん</sup>貧<sup>ひん</sup>しき町<sup>まち</sup>を通<sup>とほ</sup>りけり

本書の解説（山下一海）によれば  
「萩原朔太郎は、これら蕪村の句の  
特色として、第一に、万葉歌境に通  
じる春怨思慕の若々しいセンチメン



◀『郷愁の詩人 与謝蕪村』  
著者 萩原朔太郎  
(岩波文庫)  
定価 本体 460 円+税

トがあるということ、第二に、色彩  
の調子が明るく、絵具が生々してお  
り、光が強烈であること、すなわち  
若々しい明るさがあること、を挙げ  
る。また芭蕉と比較して、芭蕉が老  
の静的な美を慕い、反青春的風貌を  
持っているのに対して、蕪村は色鮮  
やかな青春の情緒を描いているとい  
う」としている。

そして驚嘆すべきは蕪村の詩であ  
る。以下は親友の死に際して詠んだ  
「北壽老仙をいたむ」である

君あしたに去りぬ  
ゆうべの心<sup>こころ</sup>千<sup>ち</sup>々<sup>ち</sup>に何<sup>なに</sup>ぞ遥<sup>はる</sup>かなる  
君を思<sup>おも</sup>ふて岡<sup>おか</sup>の辺<sup>へ</sup>に行<sup>い</sup>きつ遊<sup>あそ</sup>ぶ

岡<sup>おか</sup>の辺<sup>へ</sup>なんぞかく悲<sup>かな</sup>しき  
蒲<sup>たんぼ</sup>公<sup>こう</sup>の黄<sup>なすな</sup>に齊<sup>さ</sup>のしろう咲<sup>さ</sup>たる

見<sup>み</sup>る人<sup>ひと</sup>ぞなき  
雉<sup>きぎす</sup>子<sup>こ</sup>のあるかひたなきに鳴<sup>なく</sup>を聞<sup>き</sup>け  
友<sup>とも</sup>ありき河<sup>か</sup>をへだてて住<sup>す</sup>みにき・・・  
以下略

これはまさに彼の死の百有余年の  
ちに、西洋詩の影響をうけて我が国  
に隆盛した近代詩そのものではない  
か。

明治期に蕪村を発掘したのは正岡  
子規であるが、大正昭和期の詩人朔  
太郎がさらに掘り下げ、日本独特の  
ポエジー、俳句の魂の源流を案内す  
る好著である。